

学長室だより

2019.04.30 NO.16

桜を見て思い出すこと

秋田市南東に位置する国際教養大学のキャンパスには、ソメイヨシノの木が、四季折々に異なる景観を提供してくれている。今年も、道の両側から枝垂れる満開の花のトンネルをつくってくれた。北側の道路沿いに植えられた桜並木の先に建つのが、学生宿舎「さくらヴィレッジ」だ。

桜並木はいずれも年月を経た大木だが、毎年素敵な花を見せてくれており、留学生や近隣の方々にとっても驚嘆の的だ。しかし実はその大半が、枝が変形し、花芽を付けなくなる「てんぐ巣病」に感染している。伝染病で放置すると、枯死する可能性もあるという。学長としては、この老木を何とかしなければと、心を痛めている。

その桜をみていて、私が米国のワシントン州立大学で教壇に立っていた40年近く前のことを思い出した。当時日本から経済学の修士課程に、鹿児島出身の岩崎浩一郎さん（62）という留学生がいた。彼は修士論文の相談によく私の自宅にも来ていたが、論文の指導が終わって雑談になると、米国の大学が世界中から留学生を受け入れ、人材育成に多大な貢献をしていることに話題が及んだ。

お世話になった大学に何か恩返しができないか――。ちょうど前例として首都ワシントンのポトマック河畔には、今も日本から贈られた桜が咲き誇っている。私たちはいつしか、それに類するような桜並木をワシントン州立大とその所在地、プルマン市に寄贈しようという壮大な夢を抱くようになった。

ただ米国で桜の苗木を購入することは容易ではない。米国では苗を見つけられず、なかなか事が成就せずに20年近くたった2000年。日本の植木会社に注文して160本の苗木を購入し、ワシントン州立大学とプルマン市に寄付した。今では、開花の季節となると、桜の花で満ちあふれ、その大学町の名所のひとつとなっている。

そんなことを思い出したのは今年3月末に、岩崎さんが地元の鹿児島から国際教養大に私を訪ねてきたからだ。岩崎さんはホテルやバス、観光施設などを多角経営する南九州最大の岩崎グループの監査役だが、教養大でも毎年夏に行っている「大学院鈴木セミナー卒業生研究会」でも論文を発表したことがある。その岩崎さんがキャンパス内で病気にかかった桜の老木を見て、「先生、これではかわいそうだ。二人で桜を大学に寄付しませんか」と提案してくれた。

岩崎さんはこれまでに、他にもハワイ大学やシアトルのワシントン大学に「岩崎奨学基金」を設立するなど、篤志家としても知られる。私も大学とプルマン市に咲き誇る桜のことを思い出し、再び二人で桜の木の寄付計画を練り始めた。今度はここ秋田の地で、どのように花開くのか、楽しみである。



鈴木 典比古

注) 朝日新聞秋田版「あきたを語ろう」からの転載です。以下 URL からご覧いただけます。
<http://www.asahi.com/area/akita/articles/MW20190430051550001.html>

President Norihiko Suzuki, DBA